おとぎばなしの子どもたち　凍花の子ども１

羽澄　炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おとぎばなしの子どもたち　凍花の子ども１

【Ｎコード】
Ｎ６６４３Ｕ

【作者名】
羽澄　炯

【あらすじ】
彼は、異世界人だった。
大人の都合で帰る手段を奪われた彼は、ひとつの提案を受ける。
衣食住、ついでに安全も保証するかわりに、ひとりの少女のそばにいるということを。
それが、はじまりだった。

丘のうえにのぞむ

もしも、自分という存在が誰かの救いとなれるならば。

＊＊＊＊

凍花の子ども　1

＊＊＊＊

昼食前にこの丘をのぼることは、ほぼ日課になりつつあった。なだらかな斜面を歩くことは苦ではない。ただ、その先にいる人がまた嫌そうな表情をするんだろうなぁ、という予想が気分を落ち込ませるだけである。だからと言って、この歩みをやめることはしない。それでなければ、何のためにここまで来たのかわからない。この、『楽園』と呼ばれる場所に。

望む人影を見つけ、目を細める。自然と口元に笑みが浮かんでいることを彼はまだ自覚していなかった。

「ヒスイ」

名を呼ぶ。銀糸の髪が滝のように地面を流れていた。緑に映えるその色彩をきれいだなぁ、と思いながらすくい上げて指にからめる。

「ヒースーイー。お昼の時間ですよー。ルエラが待ってる」

かすかに眉がしかめられた。起きている証拠である。狸寝入りされることはしょっちゅうなので、ため息を小さくつくだけにとどめた。

「いつまでもこうしてたって意味ないよ。とりあえず起きて。文句ならいくらでも受け付けるから」

二呼吸ほどの沈黙。

そして、瞼の奥から予想通りの紫の瞳が姿を現した。もちろん、

不機嫌そうなのをかくしもせずに。
「・・・クロエ」
「なにかな」
「元いた世界に帰れ」
早速文句を言うことにしたようだ。元気なのはよいことである。しかし、その文句を聞き入れることはしないが。
「それはできない相談だよ。だって、俺はもう決めたから」
「・・・一応きこう。何を」
「君のそばにいるってね」
にっこり笑って言ったといのヒスイの表情をいったら本当に見物だった。そのことを後に言うと、しこたま怒られることになるのだが、それはまだ今の段階では想像もできない未来のはなしである。

丘のうえにのぞむ（後書き）

とりあえず、はじめてみました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6643u/

おとぎばなしの子どもたち　凍花の子ども１

2011年10月7日03時32分発行